

NEWSLETTER No.5

2013年2月発行

目次

比較民俗研究会の報告（114回～118回）	（1・2・3・4・5）
『比較民俗研究 27号』の発行	（6）
事務局よりお知らせ	（6）

比較民俗研究会の報告（114回～118回）

第114回（2012年5月18日）

丸井敬司氏（千葉大学非常勤講師 文学博士）

「妙見信仰と千葉氏一東アジアの星の信仰とわが国の妙見信仰」



発表中の丸井敬司氏

古来メソポタミア地方の人々は天空の星を観察し、天文図を作成しクッドルー（境界石標）や粘土板などに刻んだ。天空に太陽の通り道である黄道と12の星座を配した。星や星座は農業に必要な

季節を告げる指針となり、砂漠の民の移動の目印ともなる。これが1年を12月に分けて活用する暦の始まりであり星の信仰や神話が生まれてくる。

①絹の道を経て中国に入ってくると星宿信仰は古代中国天文学や星信仰からうまれ後で道教四神信仰と結合した。北極星は天空の中心に常にいる帝王星として崇められるようになる。「史記」に描かれる北斗七星は帝の乗り物と考えられた。そして帝王星は国家と同一視され国の異変や社会変革

を予言し、「司命」の神にも擬えられ信仰された。

日本に中国から北辰信仰が入って来ると中国と同じく帝として崇める星として受け入れた。「妙見神呪経」には「我北辰菩薩名曰妙見擁護諸国・・衆星中王・・代其王位・・除死定生・・守護国土・・風雨順時 穀米豊熟・・・人民安楽」とあり、北辰→天帝（天皇大帝）→妙見と読み替えられる。

②中国からは道教的な「北辰信仰」が朝鮮半島を経てわが国に伝わったが日本では仏教的な「北辰信仰」である妙見信仰へと変容していく。白河天皇のころより天台宗寺門派（園城寺）では妙見菩薩を尊星王と尊称し、密教的修法を行い国家的災厄の息災を行っていた。密教の「尊星王法」は平安後期には支配者の間で広く信仰されやがて妙見信仰として定着していく。鎌倉幕府では「尊星王法」が10回も修された。北辰に応神天皇の霊を入れたのが八幡神とされ武神として祀られた。

③この八幡神＝武神＝妙見菩薩は台頭著しい武士階級に受け入れられその後武家政治の時代を通じて盛んとなる。例えば千葉に根拠を置く千葉氏には始祖平良文が平国香と戦った時、妙見が小童として出現し勝利に導いたとする伝承があり千葉氏の守護神として妙見信仰が受け継がれた。千葉氏の妙見像は剣を持ち玄武（北辰）に乗る真武神像に表されているものが多いが、南北朝期には道教の影響を受け玄武のみならず竜頭や白蛇を持つ神像が現れる。戦国期には伊勢神道の影響から美豆良を結う妙見像や宝剣を手にした童子像など様々に変容していく。千葉を中心とした妙見信仰は江戸時代には支配者から民衆への信仰となり、鍛冶職や花柳界などに受け継がれ、また芸能の神としても盛んに信仰されていく。多くの寺社の境内の北に南面の妙見宮や神明社など祀られた。（報告者：大橋克己記）

第115回（2012年7月6日）

発表者 大喜多紀明氏（アジア民族文化学会会員）

題目 「アイヌにおける『語り』の構造について—修辭分析の視点から—」

アイヌの口頭資料はユカラやウエペケなどのような口承文芸と伝承を目的としない自然言語とに大別することができる。アイヌの口承文芸における修辭については多くの学究的成果が蓄積され、「対句」や「常套句」などの修辭技法が確認されている。しかし、アイヌの日常会話についての統語的な視点からの構造分析はそれほどなされていない。本発表はすでに文献化されている、アイヌ口承話者による日常会話資料についての構造分析であり、テキストに表出される交差対句に焦点を絞ったものである。



発表中の大喜多紀明氏

交差対句の実際については煩雑になるのでここでは紹介は省略するが、語彙、文節のある種の対称表現といえよう。今回取り上げたアイヌ口承話者による日常会話の修辞にも、ユカラやウエペケなどのような口承文芸に見出されるような交差対句が見出された。これらの交差対句は修辞的に美しく精緻であり、こうした表現が生じる一因はアイヌ民族の民俗的心意によるのではないかと大喜多氏は述べる。（報告者：古谷野洋子）

第 116 回（2012 年 10 月 5 日）

発表者 林継富（中国・中央民族大学教授）

題目 「中国少数民族の非物質文化遺産保護研究の六十年」



懇親会で挨拶する林継富氏

「多元一体」の文化構造を具える中国にとって、各地の無形文化遺産を制定し、保護する活動は大きな意味を持っている。林氏によれば、中国少数民族の文化遺産保護の過程は、①1949年に始まる民族識別工作与民族文化の収集、②1979年に始まる『民間文芸十大集成』発刊と民間文芸の記録、③2000年以降に始まる非物質文化遺産保護という3段階に大別することができる。なかでも、非物質文化遺産とは、ユネスコの「民間文化」、日本の「無形文化財」といった語にヒントを得る中で提唱された概念である。近年では、少数民族の非物質文化遺産の伝承や開発に学术界の関心が集まり、非物質文

化遺産は各少数民族が様々な舞台でアイデンティティを主張する際のツールとして、また各地の産業開発を進める際の目玉としての役割を担い始めているのだという。
(報告者：藤川美代子)

第 117 回 (2012 年 12 月 3 日)

発表者 金広植氏 (横浜国立大学非常勤講師)

題目 「1920 年代における日韓比較説話学の可能性
— 高木敏雄、清水兵三、孫晋泰をめぐって」



金広植氏

20 世紀に入り高木敏雄、南方熊楠、松村武雄、西村真次などによって本格的に展開された比較説話学は、1920 年代に清水兵三、孫晋泰、鐘敬文らによって東アジアへと展開されることになる。

高木敏雄(1876～1922)は、1912 年に「日韓共通の民間説話」を発表して日韓比較説話論を本格化させた。高木の神話・説話論は、近代学問として成立しており、既存の国学

論者の研究とは明確に区別される内容であったことである。高木は、文明史的観点から説話の起源と伝播に強い関心を示したが、説話の類似性を以て人種の同源(日鮮同祖)を論じる飛躍的イデオロギーを否定・警戒している。

清水兵三(1890～1965)は早期から柳田国男と高木敏雄の知遇を得て、民話・民謡の研究に携わった。彼は、朝鮮半島・満州・蒙古・シベリアなど広範な地域を旅し、諸民族の民話と民謡を採集し比較研究を試みている。特に 1915 年から 10 数年にわたって朝鮮社会事業研究会が刊行した月刊誌『朝鮮社会事業』を中心に数多くの論考を発表し、これらの研究は後の朝鮮民話研究者たちの高い注目を浴びている。

朝鮮民俗学の創始者と評価されている孫晋泰(1900～1960 年代)は、最初から高木敏雄の影響を深く受けて清水兵三とほぼ同時代に日韓民謡の比較研究に貢献した研究者である。孫と清水の論文や著作を通して、両者の間には朝鮮民謡の資料紹介や翻訳などにおいて頻繁な関わりが

みられることを金氏は指摘している。

植民地時期になされたこれらの比較研究は、第二次大戦後徐々に人々の記憶から忘れられてきている。東アジア比較研究の必要性が高まっている今日、これらの比較研究の実相とその記憶を丁寧かつ地道に検証する意義は緊急の課題であるという。 (白莉莉)

第 118 回 (2013 年 2 月 8 日)

発表者 黄英蘭 (中国・中央民族大学)

題目 「現代を生きるアイヌ民族とその文化伝承」



発表前の黄英蘭氏

1997年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(通称アイヌ新法)が制定され、1899年以来続いた「北海道旧土人保護法」はようやく廃止の日の目を見た。長年、差別の眼差しに曝されてきたアイヌの人々は、現在の社会において自らのアイデンティティをどのようなものとして認識しているのだろうか。黄氏の発表は、現代社会を生きるアイヌの人々の間に深く入り込む中で行われた綿密なフィールドワークに基づく報告となった。北海道アイヌ協会札幌支部のメンバーたちが伝統的な儀礼の手順に則り、厳粛な雰囲気

の中で行う先祖供養の儀式からは、アイヌの人々がアイヌ文化の伝統を固守しようとする姿を見てとることができる。一方、講座や弁論大会の開催に代表されるアイヌ語の復興活動や、伝統的なイオマンテの儀礼過程に則る形で新たに創出されたまりも祭りの実施は、アイヌの人々と「和人」たちの多様な共生関係を作り出す役割をも担っていることがわかる。さらに、黄氏の注目点は、様々な家庭環境・社会環境の下で、あえて自らがアイヌであることを主張しながら生きることを選んだ人々のライフヒストリーにも向けられた。黄氏の今後の研究に期待は高まるばかりである。

(報告者：藤川美代子)

『比較民俗研究』第27号が発刊

2012年6月、『比較民俗研究』第27号が発刊されました。第27号は巻頭言に渡部武氏の「中国伝統農具調査の回顧と展望」をいただき、特集は「現代韓国の宗教民俗」と「仏教民族の現在」でした。以下、目次を紹介します。

第27号目次

巻頭言 中国伝統農具調査の回顧と展望（渡部 武）

論文 韓国における伝承文化の観光資源化（倉石美都）

特集1：現代韓国の宗教民俗

「クッ」の民族性 - 1970～80年代の「民衆クッ」を中心として（金貞順）
濟州島のシンクッ（成巫儀礼）-約30年間におけるその変容（古谷野洋子）
現代韓国のキリスト教の「死」と葬送儀礼—胡金壽枢機卿・姜元龍名誉
牧師の事例を中心として（曹起虎）

特集2：仏教民族の現在

怨霊・御霊と「鎮魂」語—「鎮魂」語疑義考 その3（坂本 要）

兵庫県豊岡市竹野町の地藏盆（清水邦彦）

地藏盆行事に見る地域の特徴—福井県小浜市と京都府舞鶴市の事例から
（近石 哲）

研究・フィールドノート

カジメの変身（高光敏）・アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭（大
喜多紀明）・オボー民族の景観的変容—2011年オトク地域の調査辞令を
中心に（白莉莉）・柳田國男の「主体性」の学問（2）-科学認識論の視
点から日本民俗学を考察する-（フレデリック・ルシーニュ）・戦争体
験はどのように伝承されるのか（王曉葵）

龍の眼（資料と通信）韓国国立民俗博物館における地域民俗調査（李徳雨）

書評 岸上伸啓『捕鯨の文化人類学』（藤川美代子）

朝岡康二『雑器・あきない・暮らし』（渡部鮎美）

事務局よりお知らせ：「比較民俗研究会ホームページについて」

当会ホームページは、これまで開催した定例研究会や会誌『比較民俗研究』の紹介、ニューズレターを掲載するなど、広く世界に向けた情報発信活動を進めるとともに、定例研究会での発表や会誌への投稿論文の募集も行っています。HP <http://hikakuminzoku.web.fc2.com/index.html>

編集・発行 比較民俗研究会幹事会（神奈川大学大学院歴史民俗資料学
研究科佐野研究室） 連絡先：hikakuminzoku@gmail.com